

第56号

● 目次 ●

巻頭言：人類学からみたシベリアの気候変動研究の魅力	1
最近の研究会・シンポジウム	2-4
表彰式	5
著書紹介	5-6
センター客員教員紹介	7
活動風景：「天の時、地の利、人の和」— これからの歴史資料保全活動 —	8
編集後記	8



巻頭言

人類学からみたシベリアの気候変動研究の魅力

東北アジア研究センター准教授 高倉 浩樹



現在、本センターの「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互研究ユニット」の研究事業として、気候変動のシベリア地域社会への影響に関わる学際的な研究を行っている。このプロジェクトは科研費による支援を受けると共に、総合地球環境学研究所とも共同で実施しているものである。私自身の専門は文化人類学であるが、これにリモートセンシングと水文学、河川工学などの専門家と合同で、まさに文理融合なアプローチを試みている。

一般的には文理融合の難しさが指摘されることが多いし、私もそう思っていた。ただし具体的な地域の問題に限って考えていくと、そうでもないというのが実感である。レナ川では毎年春になるとアイスジャム洪水が発生する。私の場合、これを前提とした社会のシステムはどのように構

築されてきたのか、温暖化はその自然と社会双方にどのように影響するのかというのが問いである。この点で対象地域の自然動態を理解することが必須であり、理学・工学の知見からなるほどと頷くことは多い。おそらく他の河川一般では頭に残らないのだろうが、レナ川の事象だと聞けば、是非知りたいと考えるからである。

幸い理系の論文は問題設定と結論が明快で、何が解明されたか明示されている。その具体的な論証の妥当性を私が検討することは無理だが、そこから何がわかったのか、その一端を理解することはできる。また理系の共同研究者に直接素朴な質問をぶつけることもできる。そうして得られた知識を、人類学的現地調査の知見と組み合わせることで、地域情報が複眼的に把握できるようになった。私自身、最近は自然を背景としてではなく、動態的存在として捉え、その変化に対応する社会の仕組みという観点で地域社会を分析することが可能となりつつある。これを文化決定論・環境決定論いづれでもない人—自然関係を解明する独自の的方法論にしていきたいと考えている。

気候変動の科学によって温暖化はより高緯度地方で高い指標として出現することが指摘されているように、自然の事象それ自体は複雑・複合的である。その仕組みの一端を少しでも理解することは大変おもしろく、その視点がゆえにこそヒト側の社会のしかけが見えてくることもある。

温暖化と北極研究は活発だが、こと人間社会への影響については、北米大陸が中心でシベリアは国際的にも十分されていない。この点を埋めるべく、レナ川の事例を解明するのが当面の目標である。



丘の上からみた流水に覆われたレナ川
 (ヤクーツク市付近のタバガ岬、2010年5月19日)

最近の研究会・シンポジウム

東北大学東北アジア研究センター公開講演会

伊達市噴火湾文化研究所・東北アジア研究センター第四回学術交流連携講演会 「決断の時を迎えて— アイヌ民族の「天災体験」と亘理伊達家中 の「移住決意」」の開催

2012年12月1日(土)午後、仙台市内のベルエア会館を会場として、恒例の東北アジア研究センター公開講演会が開催された。今回の公開講演会は、伊達市噴火湾文化研究所との第四回学術交流連携講演会を兼ねて企画されたものである。講師には、伊達市噴火湾文化研究所から、同研究所学芸員・文化財係長青野友哉氏と、同学芸員伊達元成氏をお招きし、災害や移住という人々に大きな決断を迫る出来事を近世のアイヌと亘理伊達家を事例にお話頂いた。青野氏の講演「噴火と津波を克服した近世のアイヌ民族」は、

北海道伊達市の有珠地区に残るコタン（集落）跡の発掘から得られた17世紀の火山噴火の痕跡を紹介しつつ、当時の被災状況や復興の様子を論じた。一方伊達氏の講演「江戸時代の亘理を復元する—海を渡った記憶—」は、明治3年に北海道への移住を決意した亘理伊達家の武家文化財と呼ばれる資料から知られる亘理での生活や江戸時代の日常風景を紹介し、移住に至った経緯などについて論じるものであった。会場は百人余の聴講者で満員となり、講演後も活発な質問・応答がなされた。（岡 洋樹）



講演する青野友哉氏



講演する伊達元成氏



講演会場の様子

平成24年度訪問講座「日本とアジア」の開催

2009年から東北大学東北アジア研究センターとノヴォシビルスク大学人文学部との間で始まった「日本アジア学講座」は、2012年度で4回目を迎える。今回の講師は、窪俊一准教授（大学院情報科学研究科）と、山田仁史准教授（大学院文学研究科）の2名であった。これに東北アジア研究センターから、岡洋樹副センター長、高倉浩樹准教授、そして私が参加した。

講義は11月14日に行われた。今回のテーマは、「神話とサブカルチャーに映る現実と想像の力」である。窪先生は午前中に、「カタストロフと日本のポップカルチャー」と題して講義を行われた。日本のマンガでは、戦争、核爆発、地震等がしばしば描かれる。2011年の大震災と、それに続く原発事故を受け、マンガの現状の概観と、過去のカタストロフの物語の再評価が行われた。マンガやアニメの具体例を示しながら話をされたため、学生にも理解し易い内容であった。

午後には山田先生は、「神話とシャマニズム—日本、アイヌ、シベリア」と題して講義を行われた。日本とシベリアの伝統宗教に共通点が存在するが、両者を繋いだのはアイヌ民族である。シャマニズム儀礼の楽器も、かつての弓から太鼓（シベリア）や数珠（東北日本）へと変化を遂げ、伝播したと考えられる。講義の中で、東北のシャマンの儀礼のビデオや、アイヌの歌の録音を実際に披露され、ロシア人学生に配慮された講義内容となっていた。

両講義の参加者は50名強を数え盛況であった。ノヴォシビルスク大学人文学部、外国語学部、マネジメント学部の学生だけでなく、ノヴォシビルスク教育大学やノヴォシビルスク工科大学で日本語を学ぶ学生も参加した。今回は、人文学部の学生の中に、1、2年生の学生が多かったが、ロシア人の日本語教師が通訳の労を取られ、窪先生と山田先生の講義をロシア語に通訳し、日本語の初学者にも理解できるよう配慮された。学生と講師との対話も弾み、相互

理解が促されたと思われる。

11月15日には、4年生と5年生が卒業論文の内容を報告し、それに対し、東北大学教員が学生の研究に助言を行う授業が行われた。この授業は例年行われており、各学生は一人5分程度で、研究の経過報告を行った。4年生が4名、5年生が7名報告を行った。学生の報告は人文系の報告が多かったが、多様な側面から日本研究を行っている印象を受けた。参考までに、報告題目のいくつかを挙げると、以下の通りになる。「東日本大震災の民族心理的影響」、「ロシア人と日本人のステレオタイプの形成について」、「日本以外への神道の普及について」、「1960年代の学生運動の日米仏の比較」等が挙げられる。東北大学教員は、学生の報告一つ一つに質問やアドバイスをを行った。比較的専門領域が近かったためか、山田先生と高倉先生のコメントは懇切丁寧に行われた。

日本アジア学講座は今年度で終了する。今後、東北大学とノヴォシビルスク大学との間で、どのような共同プロジェクトを行うかは、具体化していないが、日本アジア学講座開催に先立ち、11月13日の午後4時からラブレントリーフ副学長と、プロドニコフ副学部長（人文学部）、ヴォイテシク教授（人文学部東洋学科主任）と、東北大学教員の間で一時間程度、話し合いが行われた。今後も双方で協議し、具体的なプロジェクトを探りたいという形で、話し合いは終わった。

今回は、日本アジア学講座とほぼ同時期に、本学主催の日露合同説明会が行われた。二つの行事の同時開催は、ノヴォシビルスクの人々に東北大学の存在を強く印象付けることになり、大きな効果があったと考えられる。今後、両大学間で、学生や教員の交流が更に活発化することが期待される。

(塩谷 昌史)



講義を行う窪准教授



講義を行う山田准教授

第15回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

2013年1月13日(日)、東京八重洲のサピアタワー東北大学東京分室にて、特別推進研究の第15回研究会を東北アジア研究センターのプロジェクト「東アジア出版文化」研究ユニット及び共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」と共催で開催しました。今回の発表及びスケジュールは以下の通りです。

開会 磯部彰

研究発表Ⅰ

「中国1950年代の新編歴史劇と革命現代劇について」

島根県立大学 陳仲奇

研究発表Ⅱ

「清宮廷演劇における薛家将物語について」

埼玉大学院生 柴崎公美子

研究発表Ⅲ

「『勸善金科』について—清朝宮廷の目連戯」

京都府立大学 小松謙

特別推進研究今後の予定について

陳仲奇教授は、1949年に北平が共産党政権下に入ると、伝統戯曲改良運動が緩やかに始まり、各界の文化人を集めた戯曲改進黨が成立すると、劇場と劇団の整理が行なわれ、



陳仲奇先生

やがて俳優らの意識改革を目指して戯曲講習班が組織される推移を示した。

この古典演劇改革は、1950年代の百家争鳴まで穏やかに推移していたが、1957年の反右派斗争を契機に、一挙に革命現代劇への道を歩むことになったことを明らかにした。

埼玉大学院生の柴崎公美子さんは、宋代の楊家将の向こうを張った唐代の薛家将物語と宮廷演劇との関係について、『定陽関』と『西唐伝』、『鎖陽関』から検討し、この三種の順で成立したのではないかと、との見解を示しました。柴崎さんの発表はプロジェクトにはないテーマであるため、新しい研究の拡がりを得ることが出来ました。



柴崎公美子氏

小松謙教授は、本プロジェクトでも三面六臂の活躍を



小松謙先生

いただいておりますが、今回は、五色刊本『勸善金科』を取り上げ、その目連戯が明代の鄭之珍による『目連救母勸善戯文』を物語の中間では多く流用するものの、初めと終わりでは利用せず、独自に本文を作るべく、北曲の『元曲選』や南曲の『六十種曲』に含まれる『曇花記』

等が使用されたと指摘しました。そして、宮廷の目連戯は、民間で行なわれた亡魂救済劇よりも、忠孝を宣揚する傾向が強く、皇帝賛美を更に強めた目連戯が『勸善金科』であると明らかにしました。

研究発表の後、代表者より、『昇平宝筏』影印本の進捗状況、3月9・10日に仙台市戦災復興記念館で行なう本プロジェクトの国際研究会などについての報告が行なわれました。(磯部 彰)

「真実が靴を履く間に、嘘は地球を半周する」

これはマーク・トウェインによる箴言である。そして、捕鯨問題ほど、この箴言が当てはまるものはない。捕鯨問題に関する報道や書籍、インターネット上の情報はほとんどすべてと言っていいほど、「捕鯨推進VS反捕鯨」という対立図式で描かれている。そのどちらの立場にも与せず真実を知ろうとすると、大きな壁が立ち上がる。だからこそ、批判作業を通してタテマエを崩し、ホンネを探ることによってのみ、捕鯨論争の真実に迫ることができるのである。

2月1日に第20回のリベラルアーツサロンで筆者が



会場(仙台メディアテーク)の様子

2011年に上梓した『解体新書「捕鯨論争」』をもとにした講演を行った。同書は反捕鯨・捕鯨推進、そのどちらにも与しない中立的な立場をとり、日本の捕

鯨問題にかかわっている主要な組織すべてを検証した。検証の内容も、鯨類科学から、反捕鯨運動、新聞報道、国際政治、日本の捕鯨外交に至るまで多岐にわたっており、捕鯨問題の総合知をめざした検証を展開していることが同書の特徴となっている。

タテマエをあばき、ホンネに迫るという意味では、同書のスタンスは市民オンブズマンの活動と共通点が非常に多い。両者ともに批判的検証を通じてタテマエを崩し、ホンネ=実態に即して事象を腑分けする作業を行っていると言える。こうした「オンブズマン型研究」が講演の基調をなした。

来場していただいた観客の方々からは「鯨肉の美味しい食べ方は？」といったご質問から、筆者の主張に反対のご意見、筆者の主張の細部を確認のご質問など、大変幅広い有意義な質疑応答となり、感情的対立に陥りやすい捕鯨問題について真摯に議論できたことは大変有意義であった。観客の皆さん、そしてこのような機会を提供していただいた、コラボレーションオフィス、世話人の瀬川昌久教授、そしてアルバイトと仙台メディアテークの方々感謝申し上げます。(石井 敦)

* * * * 表彰式 * * * *

高倉准教授、地域研究コンソーシアム賞を受賞

本センターの高倉浩樹准教授の著書『極北の牧畜民サハ：進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌』（2012年、昭和堂）が、地域研究コンソーシアム（以下「JCAS」と略称）の第2回JCAS賞の一部門である研究作品賞を受賞した。

JCASは世界諸地域の研究に関わる諸組織からなる地域研究のアカデミック・コミュニティであり、本センターも加盟組織の一員となっている。JCASは地域研究を人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合するための新たな知の営みと位置づけて、その発展を図るべく様々な目標を掲げている。JCAS賞はこうした目的の達成に大きく貢献した研究業績や共同研究企画、社会連携活動を顕彰するものである。



授賞式の模様（写真提供：JCAS事務局）

2012年11月3日

に北海道大学スラブ研究センターで開催されたJCAS年次集会総会においてJCAS賞の授賞式が行われ、JCAS会長の宮崎恒二氏より高倉氏に賞状が授与された。

授賞式では審査委員会による講評が行われ、高倉氏の著作については、シベリア東部の牧畜民サハのソ連社会主義体制崩壊からポスト社会主義への移行期における社会適応過程を、牛馬牧畜を中心とした彼らの生業複合を「マイクロ適応」という概念を軸に記述することで詳細に分析し、完成度の高い同時代的民族誌として提示したことが高く評価されたこと、また高倉氏の現地調査における生態人類学と社会人類学を融合させたアプローチや、生物学・生態学の進化・適応といった概念を文化史や地域史あるいは生業構造や生業複合の記述に取り入れ、序論や結論部分で文理融合や学際融合に向けた理論的模索を行い地域研究の理論と方法をめぐる議論への貴重な示唆となっている点も地域研究への大きな貢献として評価されたことが受賞理由として挙げられた。

なお本書は本センターの「東北アジア研究専書」2号として刊行されたものである。（上野 稔弘）

◆ 著書紹介 ◆

センター関連出版物

○学術図書

・奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋著『人と動物の人類学シリーズ 来たるべき人類学5』（春風社）2012年9月

本書は、「人類という名を冠する学問に位負けすることがない「人類＝人間の学」の模索である。「人類とは何か？」という問いを真摯に問いつづける人類学の再構築」を目指したきたるべき人類学シリーズ第5巻として刊行された。

タイトルには人類学という文字が入ってはいるが、人類学に留まらず多様な専門分野とフィールドを持つ若手研究者10人による論文集である。人と動物を別の存在として切り分けて捉えるという、私たちにとってなじみの深い動物観に対して、人と動物の関係の多様なあり方を、北米、東南アジア、インド、アフリカだけでなく、現代日本や中世ヨーロッパを含めて、地球規模の広がりにおいて記述・検討している。

全体は第1部「行為主体性」、第2部「分離不能性」第3部「境界性」第4部「越境性」という4部構成になっている。それぞれの部において人間と動物の間にひかれた境界に注目しながらその境界の在り方も含めた多様な人と動物の諸相が浮かび上がる内容となっている。さらに巻末論文として掲載された北米先住民研究の世界では注目の若手研究者であるポール・ナダスディの論文が日本語訳で初めて出版されたという点を指摘しておく。（山口未花子）

・山口睦著『贈答の近代：人類学からみた贈与交換と日本社会』（東北大学出版会）2012年12月

本書は、東北大学出版会の第7回若手研究者出版助成を受けて、博士学位論文「近代日本における贈与交換の変容に関する人類学的研究」に加筆、修正して出版したものである。

人はなぜ贈り物をするのか。そして、なぜそれを記すのか。

本書は、近世後期から現代まで、日本社会における贈与行為がどのように変化したのかを、多様な資料から考察した。たとえば、山形県南陽市のある農家には200年にわたる香典帳、祝儀帳、出産祝い、被災時の支援などを記録した贈答記録が保存されていた。また、日露戦争直前に青森県弘前市に従軍した次男が書いた日記も発見された。さらに宮城県丸森町筆甫地区において筆者が行った農産物の贈与についての調査などから、東北の地で豊かに育まれてきた贈答の文化が浮かび上がってくる。

そしてこれらのローカルな事例が、近代日本社会の変化とどのように関係し、変容してきたのかを、4つの贈与領域のモデルを提示し説明を試みた。近代日本社会における贈与行為は、家や共同体における「伝統的贈与」から、個人を中心とする「個人的贈与」へと比重を移した。また、その変化の重要なファクターとなる「国民的贈与」が生成、機能する過程を、戦時下における従軍者への餞別、慰問袋を事例として示した。この国民的贈与は近代に特徴的なものであるが、それ以前から存在する「公共的贈与」の変型なのである。（山口 睦）

○東北アジア研究専書

- ・第3号 川口幸大・瀬川昌久編『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』（昭和堂）2013年1月

本書は、東北アジア研究センター兼務教員である文学研究科の川口准教授が代表を務めた日本文化人類学会第44回研究大会での分科会「現代中国における宗教—共産党の政策と人々のいとなみの諸相」（2010年6月12日開催）、および川口准教授が代表、東北アジア研究センターの瀬川教授が構成員を務めた同センター共同研究「東北アジア地域における宗教の新たな展開」（2010年度実施）の研究成果として位置づけられる。宗教と信仰という切り口から現代中国を理解しようとする試みであり、具体的には道教、仏教、キリスト教、イスラム教、気功術、祖先祭祀、少数民族の信仰、チベット仏教といった具体的な宗教・信仰・儀礼等を、それぞれの現状について緻密なフィールドワークに基づきつつ専門研究者が分析している。現代中国における宗教・信仰は、共産党の政策の下に特異な形での適応や発展を遂げており、逆にそれを具に観察することは、とかく政治経済事象のみに目を奪われがちな現代中国理解の中であって、新たな鏡を通して中国社会の特質に迫ることにつながるものと期待される。そして本書はまさにそれを目指したものである。センター企画の市販学術書シリーズ「東北アジア研究専書」の第3弾。 (瀬川 昌久)

○東北アジア研究センター報告

- ・第6号 栗林均編『蒙文倒綱—資料編・原本影印—』2012年9月

本書は、『蒙文倒綱』全16巻の全頁の影印である。

『蒙文倒綱』は咸豊元（1851）年の賽尚阿（サイシュンガ）による序をもつ、モンゴル語・中国語・満洲語の3言語対照辞典である。「蒙文倒綱」はその題簽に記されている書名であるが、書目類ではモンゴル語の字母順配列辞典の嚆矢である『蒙文彙書』として知られるものに他ならない。『蒙文彙書』（＝『蒙文倒綱』）は賽尚阿の没後、清朝理藩院の建議により『欽定蒙文彙書』（1891年序）として印刻・刊行され、広く通行した。その一方で、元の『蒙文彙書』（＝『蒙文倒綱』）は写本のため、現存するものは僅かであり、稀覯本に属する。こうしたことから、本書はモンゴル文献学およびモンゴル語の辞書編纂史において高い価値をもつ資料である。

影印本として公刊するにあたり、もともと丁付けのない原本の全頁に巻数と頁番号を付し、頁の表面と裏面を見開きの形で提示した。各巻の冒頭には、原本の表紙を実物大のカラー写真で付している。 (栗林 均)

○東北アジア研究センター叢書

- ・第48号 栗林均編『「保安語詞彙」蒙古文語索引』2012年12月

「保安（バオアン）語」は中国甘粛省に居住する保安族、および青海省同仁県に居住する一部の土族によって話されるモンゴル系の言語である。本書は、1985年に内蒙古人民出版社から出版された陳乃雄等編『保安語詞彙』に収録されている保安語の語彙約7千項目の中から、モンゴル語との同源語を抽出したものである。

保安（バオアン）語はモンゴル系の言語であるが、何世紀にもわたってモンゴル高原のモンゴル族と交渉を持たなかったため、古風な言語特徴をもつと同時にチベット語や漢語の影響によって独自の言語変化を遂げたことでも知られる。モンゴル語に起源を持つ単語がバオアン語でどのような変化を遂げたかは、言語変化の観点から興味深いテーマである。

本書は、保安語の単語に対応するモンゴル文語形（ローマ字転写表記）を見出し語として、原本に記載されている保安語の形（音声記号表記）と漢語の訳語、原本の出現位置（記載頁）を示した。さらに、見出し語には、モンゴル文字によるモンゴル文語形と簡単な日本語訳を付して利用の便宜を図っている。 (栗林 均)

○東北アジア研究センター叢書

- ・第49号 磯部彰編著『清朝宮廷演劇文化の世界』2012年12月

清朝では東アジア統治の手段の一つとして宮廷演劇を用いた。宮廷演劇は、連台大戯や節戯など各種の礼典戯から成る。本書は、その宮廷演劇に関する論文、提要を収録したものである。

論文篇には、宋代の楊家将一門による北朝との戦いを描いた『昭代簫韶』及び『水滸伝』に拠る『忠義璇図』という大戯の作品研究、ベトナム朝貢使節による清代演劇の接受に関する論考を収録する。提要篇には、故宮本『昇平宝筏』や『如意宝冊』、崑弋・月令各種の承応戯についての梗概、そして宮廷演劇の影響下に成立した地方劇各作品の概要を収めている。

本書は、国内外七名の研究者による共著で、科学研究費補助金特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」及び東北アジア研究センタープロジェクト研究部門「東アジア出版文化」研究ユニット及び共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」の成果の一つである。宮廷演劇作品の初めての紹介であるとともに、東アジア出版文化研究にも貢献する内容である。 (磯部 彰)

● センター客員教員紹介 ●

アンドリヤン・ポリソフ准教授

ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所上級研究員であるポリソフさんは2012年12月から2013年3月までセンターの客員准教授として滞在している。以下は彼自身による自己紹介である。

私の博士論文は「ヤクートの社会史：17-19世紀における社会・法・個人」であり、その後もこのテーマに関連した研究を行っている。現在取り組んでいるのは、所属している研究所の基幹プロジェクトである「ヤクート人口史」である。これに関連して「19世紀後半のヤクートの歴史人口学的特徴」を当時の「ヤクート州」の境界問題と絡めて研究している。

これ以外に、「ヤクーチア諸民族史と気候変動の影響に関わる諸問題」についてのリーダーも務めている。これはロシア連邦の基盤研究助成金（2012-2014）によって支援され、ヤクーツクの生物学研究所（IBPC）やロシア東北連邦大学生物地理学科との共同事業でもある。このプロジェクトのなかで、歴史における異常気象がいつ発生し、それはどのようなものだったのかについて解明することを目的としている。これは文系・理系さまざまな学際分野による共同研究である。

私自身の個人的な研究テーマとしては、帝政ロシア期におけるシベリアにおける先住民政策についても関心がある。その観点から現在取り組んでいるのは、「<遊牧異族>（ブリヤート人、ヤクート人、ハカス人など）に対する統治」である。このなかで私は国家から「異族」とされた人々がそれをどのように考えたのか、そしてロシアのシベリア植民地化過程のなかでの国家への統合という問題を、ヤクート人を事例とりわけ地域住民が自ら残した文書史料を使いながら研究している。それはいわばヤクート人の自治における構造と機能を研究することでもある。

博士論文執筆の際の私の方法はマルクス主義による史的唯物論であった。現在私や同僚は、ヤクートの古代史や帝政期の自治の構造について、帝国政治の制度に着目した新しい方法を提案している。

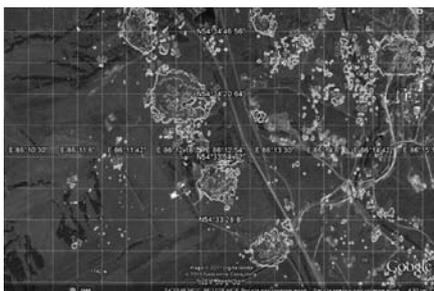


（翻訳・高倉浩樹）

トゥメン・チミトドルジェフ教授

客員教授トゥメン・チミトドルジェフ博士は、ロシア科学アカデミーシベリア支部（SB-RAS）、物理物質研究所の副所長を務めており、マイクロ波リモートセンシングの応用を専門としている。同研究所はバイカル湖の東岸、モンゴルとの国境に近いウラン・ウデ市のSB-RASブリヤート科学センターに位置している。現在、我国としては3代目のマイクロ波地球観測衛星であるALOS-2の打ち上げを準備中であり、東北アジア研究センターとロシア科学アカデミーシベリア支部が多角的な協力を行いながら、日本のリモートセンシング技術を東北アジア地域の環境保全に役立てるため、チミトドルジェフ博士を招聘した。（佐藤 源之）

地球温暖化などのメカニズム解明には、正確なモニタリングが必要である。凍土や極域においては、さまざまな観測手法が取り入れられている。特に我々が行っている衛星レーダー干渉法（インターフェロメトリ）はバイカル湖



マイクロ波レーダー・インターフェロメトリで観測したシベリアにおける炭鉱周辺の地表面陥没

周辺の凍土、土壌の定量的なモニタリングに成果をあげてきた。凍土融解は温室効果ガス放出と関連があると考えられており、従って、インターフェロメトリ法による凍

土融解地域の特定が重要となる。我々は現在TanDEM-X（ドイツ）、ALOS-2/PALSAR-2（日本）などの衛星マイクロ波リモートセンシングセンサーを利用して、10-20mの小規模な対象からバイカル湖周辺のプレートテクトニクス運動に関連する大規模なモニタリングまでを計画している。現在の研究は、バイカル湖周辺、セレンゲ川デルタ地域で、地震による陥没が起きている地下石炭層や氷層などを対象地域としている。同時に地震観測ネットワークで、周囲の地震規模を観測している。

本研究の目的は小規模から大規模に至る凍上現象に起因する現象の解明と、自然ならびに人工的な地震活動の解明にある。人工誘発地震の現象解明は落盤事故防止に役立つ。湖の動態を解析することは世界最大の淡水湖で自然世界遺産であるバイカル湖の保護につながる。

また衛星に同期した地表計測も予定しており、バイカル湖周辺のプレートテクトニクス活動に誘引される地震発生メカニズムの解明につながるだろう。我々は2013年度JAXAが打ち上げを予定するPLASAR-2を利用した計測を予定している。PALSAR-2の偏波計測機能は、より正確な地表面変化のモニタリングに利用できる。観測対象地域はセレンゲ川、ラナ川流域はヤマル、クズネツク炭層地域を計画している。

（翻訳・佐藤源之）





「天の時、地の利、人の和」 — これからの歴史資料保全活動 —

東北アジア研究センター助教 高橋 陽一

「諸普請に天の時、地の利、人の和なくして成就する事かたき」。これは江戸時代前期（18世紀）に、東海道川崎宿の復興事業などで名を挙げた民政家・田中丘隅の言葉である。「天の時」とは時期を見計らうこと、「地の利」とはその土地の状況をよく把握すること、「人の和」とは「天の時」「地の利」をわきまえた上で人を用いること、即ち適材適所の人材登用を指しており、これらの「三利」が揃わなければ土木事業の成功はないというのである。「天地人」という慣用句の語源としても知られる孟子の言葉を援用したものであろう。この言葉が収載された『民間省要』は、将軍徳川吉宗の目にとまり、田中は幕府に登用され、地域行政を担う役職に抜擢された。後に田中は、富士山噴火による火山灰流出や大雨による堤防決壊に悩まされていた河川の治水事業と周辺地域の復興に尽力し、多大な成果を挙げることになる。

筆者は平成24年3月まで岩沼市史編纂室に勤務しており、東日本大震災発生後は市内の歴史資料保全活動に携わった。建物の倒壊・解体によって消滅の危険にさらされたり、津波によって水損した古文書をレスキューし、長期保存できるよう適切な処置を施すのが活動の中心である。江戸時代の田中の事業とは規模も内容も全く異なるが、その言葉には復興事業成功の秘訣として資料保全活動にも通じるところがあるように思われる。



土蔵内での古文書の捜索

では、震災発生から約4ヶ月後に、希望者に対し市の負担での建造物の解体作業が開始され、街並みが大きく変貌していった。保全活動は、地域の復興計画に細部まで目を配りながら実行していかなければならないのである。

次に「地の利」。どの地域のどの家に古文書が残されているか。それがわからなければ保全活動は実施できない。特に、災害が起ってから古文書所蔵者を探し始めるのでは、対応が後手に回るのは必至である。岩沼では、震災以前から市史編纂のために市の職員や文化財保護員、郷土史

家から情報を収集し、古文書を所蔵する市内の旧家がある程度把握しており、震災発生後においてもどこの家に行けばよいか、判断することができた。市史編纂室職員は4人全員が岩沼市外の居住者であったが、被災状況を含め、地域の内情に精通した人々との協力関係の構築により、震災発生から約半年間で14軒の家から段ボール約270個分の古文書をレスキューすることができた。

そして「人の和」。歴史資料保全活動を円滑に遂行するには、ある程度の古文書解読能力と歴史的学識を備え、古文書の価値を現場で説明できる、あるいは虫食い・劣化・水損等で損傷した古文書の修繕を担当できるスタッフの存在が不可欠である。岩沼では、幸いにも市史編纂事業が行われており、上記の任務を担える職員が在籍していた。だが、自治体の多くの職員は、被災後、様々な復興業務に携わり、そもそも保全活動に従事することが難しいのが現状であろう。今後の災害に備え、学術機関における専門的な歴史資料保全スタッフの育成と派遣体制の構築が期待されるところである。

最後に付け加えるならば、以上のような歴史資料保全活動を担える人材、あるいは組織は、地域の中で生み出されていくことが最も望ましい。田中は、普請にあたっては地元の百姓で「骨強く其土地の案内を能知」る者に任せるのがよいと述べる。「天の時、地の利、人の和」という言葉の根底にあるのは、「地域の復興は地域の手で」という思いにほかならない。

地域の古文書を地域によって守っていく上で大切なのは、なるべく多くの人に地元の身近な歴史に関心を抱いてもらうことである。そのためには、地域の古文書からわかる「面白いこと」を積極的に発信していくことや、実際に古文書に触れることのできる環境をつくっていくことも必要である。今、歴史資料保全に関して筆者が微力ながら貢献できるのは、こうした、いわば「古文書を守ろうとする雰囲気づくり」ではないかと感じている。（なお、岩沼での歴史資料保全活動の詳細は、「歴史資料保全活動と地域行政—宮城県岩沼市の震災対応を事例に—」〈『歴史学研究』890〉を参照されたい。）



土蔵からの古文書の搬出



東日本大震災の発生から2年が経ちました。目まぐるしい変化の真っ只中であって、変わらずにいることの大切さ、難しさを痛感しています。歴史資料保全は、立場が変わっても様々な角度から関わることができるので、今後も継続して取り組んでいければと思います。なお、私は本号にて初めて編集を担当いたしました。不手際の段、どうかお許し下さい。（高橋 陽一）